

3 話をめぐる

クラシック音楽はよく聴くけれど、歌曲となるとちょっと……。そう感じておられる向きも多いのでは。でも、知らずにいるのはもったいない！ 歌曲の灯が消えませぬように。そんな思いから生まれたお話です。

1 口ずさむ人

あれは今から30年ほど前。北ドイツはブレメンの音楽ホール「デイ・グロッケ」で、バリトン歌手ヘルマン・プライがシューベルトの《夕映えに》を歌ったときのことだ。隣りに座っていた白髪のご婦人が、歌詞に合わせてそつと口を動かしているのを、私は見た。

汝が世の黄金色に輝くとき
神よ、なんとそれは美しいことか！

背筋をぴんと伸ばし、舞台をまっすぐ注視し、声なく歌う。そのまぶしいほど美しい姿が、今も忘れられない。
この間、長い歳月が過ぎた。あの美しい老婦人も、もうこの世にはおられないだ

ろう。このカール・ゴットフリート・ラッベによる詩を、シューベルトの旋律を、彼女はいつ覚えたのだろうか？ 青春時代を過ごした戦時中だろうか？ それよりも前だろうか？ あるいは自身、歌い手だったのだろうか？ いずれにしても、歌曲を口ずさむ世代が、昔はたしかに存在していた。

2 歌曲消滅の危機？

そう、「昔は」である。ドイツは音楽の国だから、音楽好きはたくさんいて、そんな人たちはきつとドイツ歌曲を幾つもそらで歌えるに違いない——そう思いたいところだが、現実はいまやこれとは異なっている。

ひとつには、人々の愛好する音楽ジャンルが、この間ますます多様化した。クラシック人口の減少は、世界的現象だろう。しかし気になるのは、ドイツ人の音楽離れである。学校教育で、人手や時間が足りないという理由から真っ先に削られるのは、音楽の時間だという。ヴァイオリニストのアンネ・ゾフィー・ムターが、ベビーシッターを募る新聞広告に「歌を歌える人」と書いたら、応募が一つもなかったとか。求められているのは、もちろん、普通の歌なのに。これももう、かなり前の話だ。
へんな理屈を言うようだが、もしもあなたが歌曲というものを、「知っている人」にしか分らない世界だから」と敬遠し

ているとすれば、もはやそうも言っていないのではないのでは？ 「知っている人」もやがてはいなくなり、歌曲がこの世から消滅してしまうかもしれないのだから。

3 大人だけの世界

歌曲の豊饒な世界に分け入るコツを、一つお伝えしよう。歌曲を、深遠で真面目なものと、むやみに思いこまないこと。これだけでも、味わいはぐんと増す。
たとえば、シューマンの《詩人の恋》。なるほどこれは、恋に破れた男の苦悩を歌ったものであろう。しかし、第14曲の次のような詩句はどうか？

きみの目からはらりと落ちる
真珠の涙のしずくちゃんたち

「涙」の比喩として「真珠」を置くなら、真珠の一語にとどめておくのが詩というもの。「真珠の涙」などというのは、ほんらい野暮なはずだ。しかもここは、それで終わらず、「真珠の涙のしずく」と野暮を重ね、あまつさえ「ちゃん」づけで締めくくっている。これはもう、意図された滑稽とみるほかあるまい。

そう、この詩を書いたハインリヒ・ハイネは、熱愛状態につきものの、ある種のぶざまを、チクリと揶揄しているのだ。そしてシューマンも、この2行にわざわざ異なる拍子をあてがって、「しずくちゃんたち」に至って

XIV.
Allnächtlich im Traume.



ロベルト・シューマン

はリタルガンドを付す。「ぶざま」を、しかと音楽化してみせるのだ。

こうしたあたりが、歌曲芸術の、大人なところ。子どもには分からない世界というの、あつていい。そんな世界がなくなくなってしまったら？ どんなに淋しいことだろう。

文／船木篤也（音楽評論）

歌曲をめぐる紀尾井ホール公演

大西宇宙&小林道夫 デュオ・リサイタル

【出演者】
大西宇宙（バリトン）、小林道夫（ピアノ）

【曲目】
ベートーヴェン：遙かなる恋人に寄せて
シェーンベルク：2つの歌曲 op.1
シューマン：詩人の恋

10/5
水
19:00

※公演開催についての最新情報は
紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。